

〔海外便り〕

ワ イ ル ド 復 活

井 村 君 江

(明星大学教授)

*1997年5月から翌年2月まで国際交流基金により、オックスフォードのモダレン・カレッジとキングストン大学にヴィジティング・スカラーとして籍を置いたが、まさにワイルド復活の息吹きを正面から感じた9ヶ月間であった。ボードレアン・ライブラリー、ユニヴァーシティ・ライブラリーに閉じ籠り、ロバート・ロス・コレクションの調査研究を中心にしたが、資料が未整理のため、あと数年はかかりそうである。10年前の同じ原稿を入れた同じ箱が閲覧室に出てきて感慨無量であった。

*5月7日ロンドンのサヴォイ・シエターで、Simon Callowの舞台〈The Importance of Being Oscar〉を観る。ワイルドの全作品の主な場面、言葉を入れながら、全生涯を演じる一人芝居である。Michael MacLiammoirが書き、自ら1960年にダブリン祭で演じて以来、1978年の死去まで(1899年生れ)18年間、ニューヨーク、パリ、ベルリン、ロンドンと巡回公演を続けた。彼の舞台を大学生だったSimonは観て感激、後を引き継ぐように自らワイルドを演じ始めたのである。Simonは13歳からワイルドの作品を読み初め、エルマンの伝記を基に演じたが、これはワイルドとの“Life-long romance”だと自ら言っている。プログラムに書いた文章は研究者よりも含蓄があり、素晴らしいワイルド役者の登場である。

*6月27, 28, 29日の3日間、バーミンガム大学のルーカス・ハウスで国際ワイルド学会が開催された。〈Gay Wilde〉, 〈Wilde and the Idea of Culture〉, 〈Writerly Wilde〉, 〈Theatrical Wilde〉と5つのセッションのセミナー。各国の研究者120名がワイルド文学の多方面に亘る特色を、泊り込みで論じあった。ワイルドの孫マーリン・ホランドの講演は〈The Wilde Phenomenon〉, 毎日プレリミナリー・セッションでなされる各専門家の話が素晴らしく、Peter Rebyの「ドキュメントのワイルド」やRegenia Gagnierの「審美主義ワイルド」などは、新しい角度からのワイルド論で示唆に富むものであった。学会は前はモナコであったが、2年後はパリのようなようである。日本での開催の日もあって欲しい。日本からは堀江女史、岩永夫妻が出席した。

*6月27日 Terry Handsが演出 Birmingham Repertory Theatre Companyが上

演じた〈The Importance of Being Earnest〉を観る。ワーキングは当たり役であったので、去年と同じ Philip Bretherton だったが、ブラックネル夫人の Diane Fletcher は台詞まわしが達者であると思ったら、数年前に観た『夏の夜の夢』のヒポリタ役の RSC の女優であった。バンベリーの家 Hertfordshire の場面で、部屋を鳥籠のように庭の中に作る舞台は評判が良かったせいか、オールド・ヴィックと同じセティングであり、3回観たことになる。翌日学会の催として、男優の Paul Doust がブラックネル夫人の一人芝居を演じたことが思い出された。オーヴァー気味だったが迫力がありテンポがよく笑わせた。今年もシェイクスピアに次いでワイルド戯曲の上演は多く、オールド・ヴィックでは『ウィンダムミア夫人の扇』, ロイヤル・シエターではビーター・ホール演出の『理想の夫』であった。観客席にいた孫のマーリン・ホランドが紹介され、百年前ワイルドが挨拶した同じ舞台に現れるのを期待したが、彼は座席を立たなかった。

*リージェント・ストリートに面したタワー・レコードのウインドに、銀ねずのディナー・スーツ同色のソフト黄色のネクタイのワイルド像が立っているので驚き、乗っていたレッド・ロバー・バスから飛び下り入っていった。Debbie Wisemanの作曲したサウンドトラック WILDE の発売日であった。〈Wilde West〉〈The Wounds of Love〉から〈An Age of Silver〉まで21曲、映画音楽だけではなく“sheer lyrical beauty”を目したというが端正なメロディが多い。ギルバート&サリバンの〈Ah, Leave Me Not To Pine〉のアレンジ曲も入っていた。

*10月14日ワイルドの誕生日を祝い映画〈Wilde〉試写会が、レスタースクエアーの劇場 Empire にあり招待された。1995年にウエストミンスター寺院のステンドグラスにワイルドの名前が入ったのを機に企画撮影は始り、完成に2年かかった。主役のスティープン・フライがモダレンのアディソン・ウォークをダグラスと歩く場面の撮影現場を見たが、「ワイルドを演じるために生まれてきた」、11歳から愛読者と自ら言うように、風貌も似ているし、彼自身作家であるので理解もあり適役。マーリンは若い男性のベツに〈Jump in jump out〉し過ぎると言うが、男同志の愛の場面も自然、暖かい心の持ち主だった Wilde の哀感がある。幾つか時代考証の間違いをマーリンは指摘したが、ジェノヴァのコンスタンスの墓石に‘A Wife of Oscar Wilde’, と刻まれたのは1963年だから、画面に出すべきではなかったと私も思う。脚本家 Julian Mitchell が用いた『わがままな巨人』の基調は利いていた。「ワイルドはヴィクトリア朝時代よりもわれわれの時代に属している」と改めて実感する。

*マーリンから招待を受け10月21日、アメリカ時代にナポレオン・サローニが撮った写真を多く使い未発表の書簡も入れた『ワイルド・アルバム』(10月刊)が出版され、記念のワイン・パーティが出版社の Waterstone であった。今年は「ワイルドの夕べ」の集まりが毎月のように開かれたが、なかでも俳優マーティン・ジャーヴェスの「レディング

監獄の唄」の朗読(10月29日)や彫刻家マギー・スミスの「ワイルド」像制作談などは興味深いものだった。大理石のお棺の腰掛けに煙草を手にしたワイルドという奇抜な着想のブロンズの胸像は、チャップリンの銅像の建つレスター・スクエアに据えられる予定だが、資金集めの段階にある。レディング監獄のチェスナツ・ウォークに200年に詩碑建立の計画もある。タウン・ホールにはワイルドの部屋が出来ており、町の〈Monk's Retreat〉というパブには〈The Man in Cell 33〉というコーナーができて、貴重な写真が飾ってある。監獄の守衛が〈Reading Goal〉のペーパー・バックをプレゼントしてくれたのは感激だった。

*10月20日からマダム・タッソーの臘人形が公開、長身の夜会服の若いオスカー像、1882年アメリカ講演旅行時代の姿である。ナポレオン・サローニの写真、ワイルドが愛したギド・レニのサン・セバスチャン像、リチャード・エルマンの伝記等を基に制作したと、Paul Bennett は言う。28日にはワイルドが幼児・少年期を過ごしたアイルランドのダブリン、メリオン・スクエアの北西コーナーにも Danny Osbourne 作大理石の彫刻が建った。グリーン・カーネーションを手に部屋着姿のワイルドがトリニティのカレッジ・タイをしているのはお愛嬌である。こうした時期にニューヨーク大学の Karl Beckson 編集の事典(Merlinの序文)より早く、日本ワイルド協会会員の協力になる『オスカー・ワイルド事典』(北星堂)が刊行され、ロンドンのワイルド協会の名誉会長でモダレンの Anthony Smith 学長に贈呈したところ、内容の豊富さ程度の高さに驚かれ、大変に嬉しかった。

*2000年は没後百年センテナリーの年、大英博物館はワイルド展を企画しており、内外共に実質のあるワイルド復活の年になる兆しがある。

(1998年3月記)

